

## 愛のゆりかご

「隣人を自分のように愛しなさい」これは聖書の隣人愛の教えです。ここで大事なのは「自分のように」という言葉です。自分を愛する人にしてはじめて、他の人を大切にできます。その意味で自分を愛する心が、隣人愛の土台だと言われています。

優しく抱きしめてくれる母のふところが、愛のゆりかごです。乳児は何から何まで親の世話にならなければ生きていけません。しかし母のふところに優しく抱かれている感触を通して、「あなたを愛しているよ」という心が伝わってきます。そして親から大切にされているという感覚が、自分を大切にすることを育てます。

自分の感情を言葉で表現できる年齢になりますと、わが子の言葉に親がどのように答えるかが、人格形成を大きく左右します。「お母さん見て！夕日がきれいだねー」「ホント、本当にきれいねー」「痛い！お父さん痛いヨー」「そうか、痛いか、よしよし」親が自分の感情に共感し、肯定的に受け入れてくれますと、「それでいいんだナー」と分かって、自分にたいする信頼感が生じ、自分を愛する心が育ちます。

「お父さん、あの犬こわいよ！」「臆病者！ただの子犬じゃないか」「お母さん、あの洋服すてき！」「へー、お母さんはちっともそうは思わない。どうしてあんなのがいいの？」もしもこんな会話が繰り返されたら、自分の感覚は間違っているのではと不安になり、自分を肯定的に受容できなくなるでしょう。

あるいは親から褒められようとして、親の感じを先取りします。「お母さん、お母さんはどう？あの花きれいね。」「そうよ、とてもすてき。お母さんも大好き」子どもはホッとして、何でも、親に合わせて感じようとしていきます。そして自分の感情や判断が親に依存的になり、自信を失っていきます。

あるがままの自分を肯定的に受けとめて愛せる人は、他の人をも自分と同じように受容し、愛せるようになるでしょう。そして心の内に養われてきた自信に支えられて、人生の困難に立ち向かっていける人になるでしょう。

## 母性に惹かれるのは

キリストは憐れみ深い人はさいわいであるとおっしゃいましたが、この「憐れみ」はヘブル語で子宮・胎(複数形)という語が使われています。ユダヤ人は憐れみ深い人を「子宮を幾つも持っている人」と表現したのです。面白いですね。どうしてでしょうか。

私たちの体には実に沢山の臓器があり、その働きによって命が養われ、守られています。「しかし唯一つ、自分の命ではなく、他の命を養い育てる働きをする臓器がある——それは女性にのみ備えられている子宮です」という言葉を読みました。

子宮は命を受け入れる時に選り好みしません。入学試験をしません。将来どんな人になるか全く見当がつかないまま、無条件で受胎します。そして10ヶ月間じっと抱き続け、自分の血と肉と命までも分け与えるのです。まさに慈悲そのものを表す素晴らしい臓器なのですね。

私たちが母性に惹かれるのは、憐れみそのものの働きをする母の胎内で先ず形造られ、生まれ出ると母のふところに抱かれて乳を飲み、眠り、また自分を見つめる母の瞳をじっと見返しながら、母の憐れみ深さを全身で感じて育ったからではないでしょうか。

多くの教育専門家は「情緒の安定した子どもたちに、健やかな人格形成がみられる」と言います。そして情緒の安定は、安らかな心を持つ母親のふところで養われていくそうです。神様は私たちの魂をしずめ、安定した情緒の持ち主になるようにと、母のふところを備えて下さったのだと私は信じています。

誰一人助けしてくれる人も居ない孤立感のなかで、厳しい苦難に直面した人の歌が聖書に記されています。

**私を母の胎から取り出し、その乳房に委ねてくださったのは、あなたです。私を遠く離れないでください。 聖書**